


# 読書推進運動


 公益社団法人  
 読書推進運動協議会  
 〒162-0828  
 東京都新宿区袋町6  
 日本出版クラブ会館内  
 TEL 03(3260)3071  
 FAX 03(5229)1560  
 発行人 宮本 久  
 編集人 片岡 伸子

No.593

★2017年度 読書推進運動協議会 事業計画(3頁)

★野間読書推進賞受賞者の活動報告(5頁)

定価60円

会員の購読料は  
会費の中に含まれる



## 子どもたちの声が聞ける場所

「こどもの読書週間」によせて

一般社団法人日本児童文学者協会  
 副理事長  
 加藤純子

かとうじゅんこ  
加藤純子

2000年の子ども読書年では「大崎ゲートシティ」に、はじめて子どもの本のすべての団体が集まりました。そこで夏の間さまざまな子どもの本に関連するイベントをそれぞれの団体が主催して行いました。そのときの驚きを、いまでも覚えています。「子どもの本に関わる人たちって、こんなたくさん、いらっしやるんだ!」と。

子どもの本がなかなか売れない状況の中、作家自らも子どもたちの場所に向かい、行って、子どもたちとおしゃべりしたり、自分の本を宣伝したりする場所をいただけるのです。こんなステキな機会を私たち日本児童文学者協会(児文協)も有効に使いたい。そう思い、1000人近い児文協の会員に向けた会内誌「ZB通信」に「上野の森親子フェスタ」の告知や呼びかけを載せたり、児文協のHPや私のFacebookなどでひろめていきました。

また、年頭に行われた児文協の12の部と委員会の100人近い会員スタッフの集まりでも、2000年の「子ども読書年」から始まったこうした歴史の流れをお話しして、親子フェスタへの参加者を募りました。昨年は作家団体の参加を求めたのが3月だったのが、周知をひろく行うことができず、身近にいる人たち7、8人に集まっていただけですが、それぞれ10冊ほど準備していただいていた本のすべてが完売。その体験談を年頭の会で数人の方に語っていただきました。

会では、昨年の反省点も出ました。それは「お客さんである子どもたちにどうテントのサインセールに足を運んでもらうか」ということです。「積極的に来てもらうための、なにか手立てが必要かもしれない」そうした意見が飛びかきました。「じゃあ、どうしましょう?」その問いかけに「私でよかつたら占いをやります」そうお声をあげてくださったのは作家でありプロの占い師でもある方です。彼女は創作だけではなく子ども向けに占いの本も出版している人でした。

「私も児童館でワークショップを教えています。よかつたらワークショップをやります」作家でありワークショップの達人でもある方からのお申し出です。「私、サインセールの参加します」「私たちは読み聞かせをします」……。読み聞かせをします。親手として書くだけではなく、こうした輪の中で、直接子どもたちに本を手渡ししている、という思いをみんなが共有した瞬間でもありました。

\*5月5日には、国立国際子ども図書館において、児文協主催で理事長の内田麟太郎さんと絵本画家の西村繁男さんによる対談も行われます。



## ●公益社団法人 読書推進運動協議会

# 2017年度の事業計画案

2016年に読書推進運動協議会の中心的な事業である「読書週間」が70回の節目を迎え、周年企画も無事行なわれました。2017年度(平成29年度)はこの記念事業の検証をふまえ、いままでも積み重ねてきた読書推進の諸活動と合わせて、例年以上に読書推進活動が活発になるべく、努力してまいります。

第70回「読書週間」の記念事業は、第23回東京国際ブックフェアに出展、千代田区立千代田図書館で記念パネル展、「読書週間70周年記念しおり」約120万枚を製作して全国の書店・公共図書館に配布を行いました。今後も会員社の発展に貢献できるような事業の開発が望まれています。2018年(平成30年)には「こどもの読書週間60周年」、2019年(平成31年)には「読書推進運動協議会創立60周年」を迎えます。今回の記念事業の検証・改善をしつつ、それぞれの事業の計画的予算措置を行い、内容を充実させていきます。

ふたつの読書週間の標語は、会員社のみならず、全国の図書館そしてホームページで一般の方々にも呼びかけて募集しています。とくに取次会社や出版社には事業委員として深く関わっていただき、それぞれの社員の方々からたくさんのお声をお願いしています。こうした作業を進めるなかで、認知度を高めていくようにいたします。2017年度(平成29年度)の春の「こどもの読書週間」の標語は「小さな本の大きなせいかい」に、秋の「読書週間」の標語は「本に恋する季節です!」に決定しました。

「読書週間」は、ポスターのイラストも一般から公募しており、2016年は応募は減りましたが、の、標語とマッチした力作が多く寄せられ、ポスターも好評を得ました。「こどもの読書週間」のポスターにつきましては、2014年より絵本作家・荒井良二さんにイラストを、グラフィックデザイナー・杉浦康平さんにデザインをお願いしております。

読書週間の事業の一環として行われ、全国の読書推進運動協議会の推薦をもとに選ばれた「全国優良読書グループ表彰」と、永年にわたって読書の普及に貢献された団体と個人を表彰する「野間読書推進賞」の顕彰事業は、関係団体や各道府県の読書推進運動協議会との緊密な協力関係のもとに推進しています。近年は、高齢者や障がいを持つ方々に対する地道な読書支援活動を行ってきた団体の推薦受賞が増えています。読書週間にも新しい動きが見られます。

全国の読書推進運動協議会から寄せられた推薦図書をもとに作成する、約21万部の「若い人に贈る読書のすすめ」と、約14万部の「敬老の日読書のすすめ」のリーフレットは、今年度も関係の団体を通じてお配りしていきます。学校や図書館からの問い合わせが多いのは、積極的に活用されている表れと思います。

機関紙「読書推進運動」は、本年度も後述の「本が好き」運動と連携し、運動に参加いただいている野間読書推進賞受賞者の活動を紹介してまいります。

ホームページでの「読書週間」「こどもの読書週間」のしおり、ポップなどの素材データの配信も好評をいただいております。さらに魅力ある素材の提供に取り組んでいきます。

2013年(平成25年)12月から行っている「大震災出版復興基金」の口座管理は、寄附金控除団体の指定を受けていますので、引き続き進めてまいります。29年度の活動は、5年の節目を過ぎて縮小の方向に向かっております

が、①震災遺児たちへのクリスマス・図書カードプレゼント事業 ②「第2回ガンバレ福島! 私のおすすめ本」メッセージカードコンテンツ ③「第3回ガンバレ岩手! 私のおすすめ本」メッセージカードコンテンツ! 「第3回ガンバレ宮城! 私のおすすめ本」メッセージカードコンテンツ」などの被災地イベント補助事業はつづけてまいります。

「出版物に軽減税率適用を求める専門委員会」の事務局に入って活動してきました。2015年の与党の28年度税制改正大綱を受け、草の根の国民運動として出版物に軽減税率適用を求める運動を強くアピールすべくスタートした「本が好き」運動に対しても、歴代の野間読書推進賞受賞者の方々と連携をとりながら、より積極的に取り組んでいきたいと考えます。

現在40道府県にそれぞれの読書推進運動協議会があり、読書推進運動協議会のさまざまな事業を行っていくにあたり、連携を強め、多大な協力をいただいています。しかし、読書推進運動協議会のない都府県が、7つあります。改めてこうした都府県に働きかけ、読書の普及という事業の活性化をはかっていきます。

■伊藤忠記念財団「子ども文庫助成事業贈呈式」

# 子どもたちに読書の機会を届ける 人たちへのエール！

伊藤忠記念財団は3月3日(金)、東京都港区の伊藤忠商事東京本社ビルで「子ども文庫助成事業贈呈式」を開催した。

開会の挨拶で、財団理事長の小林栄三さんは、助成受領者、功労賞受賞者へのお祝いのあと、「これから、すべての子どもにも豊かな読書の機会を、みなさんとともに提供していきたい」と述べた。

選考委員長の島弘さんは、選考経過報告で、「高学年以上の子どもの対象とする文庫や実演活動が増えてきている。また、図書館や学校での読み聞かせがその他の施



功労賞受賞の野々瀬協子さんは、戦時中の体験から子どもの本の大切さを語った

設へも広がるなど、みなさんの長年の積み重ねの成果を感じた」と語った。

子どもの本購入費助成受領のここに文庫(徳島県)の三木鈴江さんは、昔話やわらべ歌も子どもたちに紹介し、中学・高校へも出張している。「23年前に念願の文庫を開きました。『ここに文庫は私のオアシスでした』とのうれしい手紙をもらったこともありま

す。いまの子どもたちはとても忙しいですが、長期の休みに長い物語を紹介するとよく読みます。本の力と子どもの力を信じて、続けていきたい」と喜びを述べた。

病院・施設子ども読書支援購入費助成受領のわくわくパンダ(和歌山県)の山本育代さんは、メンバー2人で病院を訪問している。「手持ちの絵本が子どもの年齢にあわないこともあり、絵本を充実させたくて、今回、応募しました」と語った。



贈呈式後のパーティーでは、助成受領者・功労賞受賞者が交流を深める

どもの本が出版されなかつた戦時中に子ども時代を過ごした飢餓体験が私にはあります。国民の知性が向上しないと真の民主主義とならない。文庫はその基礎となるものです」と、くりの実文庫(東京都)の相川照子さんは「47年前に『楽しい本の学校』とチラシを配り、27冊の本が始めたら、たちまち貸す本がなくなつた。いまは人形劇や手遊びも入れ、楽しく続けています」と、竹の子文庫(兵庫県)の中尾幸さんは文庫開設に向けて石井桃子さんから受けたアドバイスを紹介し、「車を買うことを考えれば、文庫ができる」と、文庫が家族みんなの夢となりました。97歳の母はいまでも文庫に関わっています」と、それぞれの思いと歩みを語ってくれた。

■「上野の森親子フェスタ2017」

# 子どもの本の世界をもっと知る 多彩な講演会を予定！

5月3日〜5日に東京都台東区の上野恩賜公園で開催される「上野の森親子フェスタ2017」の概要が決まった。事前申し込みが必要なプログラムは出版文化産業振興財団(JPIC)ホームページから申し込める(締切4月16日)。

そのほか、約5万冊の絵本・児童書が謝恩価格で販売される「子どもブックフェスティバル」も3日間、中央噴水池周辺で開かれ、各ブースではおはなし会や、作家によるサイン会・ワークショップなどが予定されている。

「上野の森親子フェスタ2017」講演会一覧(予定)

日	会場	時間	タイトル	講師
5/3	東京都美術館 講堂	11:00 ~ 12:30	おもしろがると世界がひろがる	鈴木のりたけ
5/3	東京都美術館 講堂	14:30 ~ 16:00	藤本ひとみ先生+住滝良先生 トーク&サイン会	藤本ひとみ 住滝良
5/4	東京都美術館 講堂	11:00 ~ 12:30	親子で楽しむお話し会「恐竜博士 になろう！」	黒川みつひろ
5/4	東京都美術館 講堂	14:30 ~ 16:00	かいけつゾロリ 30周年の歩み	原ゆたか
5/5	東京都美術館 講堂	11:00 ~ 12:30	サルを知るとはヒトを知ること! 熱帯雨林の妖精・ボノボの生活	伊谷原一
5/5	東京都美術館 講堂	14:30 ~ 16:00	絵本で元気に	長谷川義史
5/5	国際子ども図書館 研修室	10:30 ~ 12:00	対談「人との出会い・絵本の誕生」	内田麟太郎 西村繁男

●JPIC ホームページ <http://www.jplic.or.jp/> (申し込み多数の場合は抽選)



「第22回 日本絵本賞」「第1回 日本絵本研究賞」

「ことばにならない思いや科学情報を効果的に伝える、絵本の可能性」

3月28日(火)、東京都千代田区の毎日ホールで「第22回 日本絵本賞表彰式(主催)全国学校図書館協議会/毎日新聞社」が行われた。本年の受賞作は次のとおり。

●日本絵本賞大賞

『ぎょうはそらにまるとつき』 荒井良一著 偕成社

●日本絵本賞

『イモリくんやモリくん』 松岡たつひで/さくえ 岩崎書店

『くじらさんのーたーめならえんやーら』 内田麟太郎/作、山村浩二/絵 鈴木出版

『干したから...』 森枝卓士/写真・文 フレーベル館

●日本絵本賞読者賞(山田養蜂場賞)

『あいつとふたご』 矢野アケミ/作・絵 鈴木出版

最終選考委員長の松本猛さんは、「今回は日本の絵本にすぐれたものが多く、翻訳絵本賞を該当なしとし、日本絵本賞を3点とし

ました。写真で視覚に訴えて平易な文章で説明する、科学絵本に物語を組み込むなど、科学絵本に物フィクション分野により作品が多かった。大賞の『ぎょうはそらにまるとつき』は、一枚の絵では語りきれないことを、絵を積み重ねて絵本の形とすることで、層となつてひとつの空間を創つた。絵本でなかに語れるか、哲学・思想が込められています」と、選考報告を述べた。

『Goodnight Moon』で絵本に興味をもち、どこかで月の絵本を創るだろうと思っていた」という荒井良二さんは、窓を開けたり

空を見上げたときに「あ、月がでてくるよ」と人に伝えたくなる気持ち、それに「ほんとうだ」と答えたあとの沈黙。この人に話せない感覚、ことばにしないほうがいいものを閉じ込めて、絵本にしました」と、受賞作について語った。

絵本学会の創立20周年を記念し、絵本に関するすぐれた研究論文・評論を顕彰する日本絵本研究賞(主催)絵本学会/全国学校図書館協議会/毎日新聞社)が今回より設けられ、第1回となる賞が贈られた。

●日本絵本研究賞

論文「長期入院児のための絵本の読みあい」

村中李衣(ノートルダム清心女子大学教授)・西隆太郎(ノートルダム清心女子大学准教授)



荒井良二さんへの賞状授与



日本絵本賞受賞者がそろって記念撮影

別冊「読書週間 行事報告」一覧

ページ数が大幅に増加！ 一部の行事内容をご紹介します

『読書推進運動』593号の別冊「2016 読書週間 行事報告」

「本の複製・お楽しみ袋」 図書館が推薦する本を数冊セットにし、書名・表紙がわからないようにラッピング。推薦コメントや、作中の印象的な一文やセリフの抜き書きを頼りに、利用者が借りる。対象年齢別やテーマごとにセットを組んだり、「ラッキープック」「本のおみくじ」などの名称で実施する図書館もある。

「ぬいぐるみのお泊まり会」

図書館でのおはなし会に、子どもがお気に入りのぬいぐるみとともに参加し、その後、ぬいぐるみは図書館に一泊。夜の図書館を探検したり、ぬいぐるみ同士で読み聞かせをしたりする様子を写真に撮り、翌日、子どもがぬいぐるみを迎えに来たときに進呈。ぬいぐるみが推薦する絵本を子どもに貸し出すこともある。

「ビブリオバトル」

登壇者(バトラー)がそれぞれ、自分の好きな本・推薦する本を決められた時間(通常5分)で紹介。その後、会場から質問を、決められた時間で受け付ける。バトラーの発表と質疑応答終了後、「どの本がいちばん読みたくなったか」

を参加者の投票で決定する。

「本の複製・お楽しみ袋」

図書館が推薦する本を数冊セットにし、書名・表紙がわからないようにラッピング。推薦コメントや、作中の印象的な一文やセリフの抜き書きを頼りに、利用者が借りる。対象年齢別やテーマごとにセットを組んだり、「ラッキープック」「本のおみくじ」などの名称で実施する図書館もある。

「FANT」

図書の種類番号を利用。利用者にビンゴカードを配布し、貸出時に該当する分類番号にスタンプを押ししたり、シールを貼る。子どもが対象の場合は、番号ではなく、「科学」「社会」「おはなし」などジャンル名を使うこともある。景品つきの場合、ビンゴの数によって、雑誌の付録や図書館のオリジナルグッズなどを進呈する。

「スタンプラリー」

貸出や対象イベントへの参加 図書館・分館への来館などでスタンプを集める。集めた数で雑誌付録やオリジナルグッズなど進呈。

■野間読書推進賞受賞者の活動

「こんにちは かやのみ会です！」  
—— 一歩一歩で、創立30年を迎えました ——



かやのみ会 公式キャラクター

小林 純子

山形新幹線の始発駅「新庄」駅を背にぶらり歩くと、道端にいっつもの石のオブジェを発見。しつぽの生えた茶釜や、にんまり笑うかわうそ。この街の通りは、「金の茶釜とおり」や「鴨取り源五郎とおり」など、民話のネーミング

事をする」あくまでも「家庭・仕事」が第一。「けして無理をしない」をモットーに会員同士がフォローしあつてきたことが、30年継続の原動力です。

なので。また8月に行われる、歌舞伎名場面や昔話を題材とした絢爛豪華な山車(やたい)20台余りが通りをうめつくす「新庄まつり」は昨年、「ユネスコ無形文化遺産」に決定しました。

活動をスタートさせたころ、当地域では「読み聞かせ」は現在ほど一般的ではなく、まず第一に取り組んだのは、会員のスキルアップでした。講師を招いて、多くのことを学びました。そして、図書館との連携を図りながら、学校や幼児施設を訪問し、「朝読みの実践」「人形劇」「ブックトーク」、さらに伝承民話を基にしたオリジナル絵巻の作成など、徐々に活動の幅を広げてきました。

そんな「ものがたり」に根ざす街「新庄」に、読み聞かせボランティアサークルとして30年前に生まれたのが「かやのみ会」です。市立図書館の庭に立つ樹齢数

また、8年前から協力させていただいているのが、学生とのコラボ「山形大学エリアキャンパスもがみ」です。地域の活性化と大学教育の充実を目的とし、教養課程のキャリアコラムとして、さまざまな学部の学生が参加する企画で、「読み聞かせ」のアドバイスをさせていただきました。最初は照れ

「できる人が、できる時にできる」

たり、声が聞き取れなかつたりする学生たちが、子どもたちを前にすると、いきいきと語り出します。子どもたちも、そんなお兄さん・お姉さんの様子に新鮮さを感じてくれるようです。

毎年、新しいことにチャレンジし、昨年は思い切つて外へ飛び出しました。地元のみなさんの新鮮野菜・食べもの・素敵な小物が揃う、月に一度のこだわり市場「キトキトマルシェ」の会場へ、移動図書館車「かやの木」号に本とおはなしをのせ、出前図書館として

参加。人々の暮らしに息づいた空間のなかでの「本活」プロジェクトです。ベンチいっぱいのお客さまを前にした「おはなし会」、紙芝居では「ワニの役」「歯医者さんの役」と、学生たちが大活躍。青空の下で季節の風を感じる一日となりました。

結成30周年の記念公演には、なつかしいメンバーが集まり、新旧のオリジナル作品を展示し、思い出をたどりながら、しばしのタイムスリップ。パワーポイントを取り入れた子どもたちとの掛け合い、会場いっぱい広がる長さ30メートルの絵巻など、演じる私たちも子どもたちと一緒に「おはなしの世界」を楽しみました。

私たちにとつての30年は、ひとつのきつかけです。さて、これから次は何をしようか、どんなおはなしをしようか、どんな作品を作ろうかな、とウキウキしているのが本音です。

一方、進む高齢化社会のなか、近年、介護施設からの訪問依頼が著しく増えています。高齢者はみなさんそれぞれに人生の歴史があり、時代を生きてきたプライドがあります。そんな方たちに、どんな「おはなし」をすれば心地よく楽しんでいただけるか、模索



かやのみ会のアドバイスを受けた学生たちがおはなし会で活躍!

は続きます。生涯を通じての「読み聞かせ」の大切さを痛感するところです。高齢者の尊厳に配慮しながら寄りそう気持ちを忘れず、ボランティアサークル「かやのみ会」としての工夫と努力をしています。

生まれた瞬間から、刺激的な映像や音楽に囲まれて育つ、現代の子どもたち。そんな子どもたちが、絵本や紙芝居を見ると、目を輝かせ、次第に前のめりになっていきます。その背中が私たちは大好きです。テレビアニメやスマホでは得られない「やさしい感動」を共有できることが、私たちにとつての喜びであり、次の活動への「心の糧」となります。30年目の一歩、また一歩、気分は「ぼちぼちいこか」といったところでしょうか。

かやのみ会のトレードマーク、おそろいのベストで、30周年記念公演に臨みました



かやのみ会のトレードマーク、おそろいのベストで、30周年記念公演に臨みました

### 優良読書グループの歩み (4)

2016年度の「読書週間」に際して都道府県読書推進連盟 動協議会より推薦され、本会において表彰した全国の優良読書グループの活動報告を掲載いたします。  
(順不同)

#### おはなしくれよん

代表者 阿部 正記

秋田県鹿角市

〈推薦〉  
秋田県読書推進運動協議会

「おはなしくれよん」は、2002・2003年に秋田県が行った読み聞かせサポーター養成講座の受講者を中心に、2004年に発足。今年で13年目となる。会員は現在14名(男2・女12)で、退職者が多いが現職でがんばっている人もおり、その人は学校の朝読書の時間に本を読んでそのまま出勤するという態勢。

会は花輪図書館の関係団体の位置づけで、要請は図書館に出してもらうが、運営は独自に行っている。会費はなく、車を持つている人はない人を利用して会場へ、ほか楽器演奏・パソコンなど、役割分担をしている。

活動場所は学校や保育園、児童

クラブが主で、定期化している場合も。ある小学校は月1回、授業前の朝読書の時間に呼んでくれる。15分間できつちり終わらせるのに気を使うが、その日は普段ゆつくり登校している子ども時間とおりに教室で待つっていると聞くとはりきざざるを得ない。授業時間を使わせてもらうときは、本の選び方にも頭を使う。戦争や地元の昔話などのテーマをもらったり、図書館で本をあれこれ探す。古くからの会員の意見も参考になる。

月初めに、各学校などから集まった要請にだれがどこへ行くかを話しあう例会を設けており、そのとき交替でひとりずつが絵本を読み、批評しあう研修も行っている。各校を訪れる回数は、最近では年間70回以上、対象児童数は4千人を超える。これを支えるのは、子どもたちの笑顔だ。相手のために行っているようで、じつはこちらがエネルギーをもらっている。本と子どもが好きな人が自由に集まり、話しあえる場を図書館など

で持てたことも、長く続けられた理由のひとつだろう。

たいいての絵本はただ読むだけでなく大丈夫だが、小さい子どもたちの注意を引きつけるには手遊びや歌も有効だ。これができないと悩む人もいるけれども、それぞれ会員の特徴を生かしてあげればそれで十分と思う。だれでも最初は素人で、続けるだけで精一杯。それがここまでできたのだから、とにかく続けていけばより大きなものになっていけると信じる。

#### かさい・えほんの森

代表者 松本 孝美

兵庫県加西市

〈推薦〉  
兵庫県読書推進運動協議会

「ああ、おもしろかつたなあ」絵本を読み終え、余韻に浸るような静かなひととき、小さな声が響きました。読んだ絵本は『もこもこもこ』。声の主は、4歳ぐらいの女の子。その声に会場は、またいちだんと静かで温かな雰囲気包まれるのでした。こんなおはなし

会を市立図書館キッズコーナーで、毎週土曜日の午後2時から30分間、小学校低学年程度までを対象に、年間50回前後続けています。市立図書館に協力し、これが定例の活動になります。 私たちは兵庫県播州平野のほぼ中央部に位置する加西市で活動しています。2003年に市立図書館が移転し開館。その後個々で活動していたボランティアに声をかけ、勉強と相互の連携をと2009年結成されました。メンバーの年代は幅広く、子育て中から孫育て中まで常時20人ほどが活動しています。全体のボランティア会議は年2回、年間の予定や担当目を調整します。テーマを決めて、おはなしや絵本、推薦図書紹介などもあります。会議後はおはなし会で使う小道具を作ったり、季節の折り紙を折ったり楽しいひとときを過ごします。不定期ですが、小さな広報紙も作っています。最近では図書館以外のところではおはなしを語る機会も増えつつあり、うれしいことです。

象に、年間50回前後続けています。市立図書館に協力し、これが定例の活動になります。

7年間の主な行事を紹介しましょう。講師を招聘して「親子のための絵本講座」や「絵本とおりがみ講座」など、自分たちのスキルアップを目指したものです。子どもたちとおはなしを楽しみたいと、劇団クラルテ公演や地元で3セクター北条鉄道のレールパス

内では紙芝居やおはなしを語ったこと。また、播磨在住の版画家 岩田健三郎氏講演や版画原画展は子どもから大人まで幅広い年代の方に参加いただきました。2017年2月で7回目開催の「絵本と音楽をつづるおはなし会」は大切な恒例行事です。これらの活動の多くは「子どもゆめ基金」を受けたことが大きな推進力となりました。活動資金をどうするか、いつも頭を悩ますところですが、少子化のいま、私たちは大切な子どもたちの心によりそうおはなしを手渡すことができているか、仲間同士で話しあい、ていねいに勉強し、ささやかな活動を続けていきたいと心新たにしています。



子どもたちの心によりそうおはなしを届けたい



### 石井町ひよこクラブ

代表者 岩本由美子  
徳島県名西群石井町

徳島県読書振興運動協議会  
〈推薦〉

1998年に石井町立中央公民館図書室の読み聞かせボランティアグループとして、「石井町ひよこクラブ」は誕生しました。私がこのグループに仲間入りしたのは、その2年後です。「子どもたちのために、読み聞かせボランティアをやってみない？」と子どもの同級生のお母さんから誘われ、絵本を読むくらいならと軽く「いいよ」と返事をしてから今日まで、この会で活動しています。グループに入ったころは、就学前の子どもの保護者を対象とした子育て支援教室や子育てイベントを企画し参加するなかで、読み聞かせの大切さを保護者に、絵本の魅力を子どもたちに伝える活動が中心でした。広い会場でも子どもたちが楽しめるようにと、おはなし会用の大がかりな作品を制作していたのもこのころです。いまは著作権の問題もあり、これらの作品の出番はほとんどなくなり

ました。しかし、いつか、また子どもたちにお披露目したいと、大切に保管しています。

現在は、公民館だけではなく、地域の小学校や幼稚園、町内のさまざまな支援施設などで、絵本の読み聞かせを中心としたおはなし会をしています。それぞれの会場にあわせ、読み聞かせのほか紙芝居、ストーリーテリング、簡単なペープサートやエプロンシアター、手遊びやわらべ歌遊び、工作などを交えたプログラムを企画しています。

昨年度の私たちの活動回数は200回を超えていました。会員一人ひとりが自分にできる活動をしてきた結果です。なかには活動場所が



地域のいろいろな施設で会場にあつたおはなし会

重ならず、ほとんど顔をあわせる機会のない会員もいます。しかし、自分は参加できないおはなし会をがんばって続けてくれている仲間がいるということは、活動を続けていくための原動力のひとつになっているのは確かです。

私たちのグループでは活動を支えるため、情報の発信や活動報告書の作成などをする事務局、お金の管理やボランティア保険の加入などをする会計を置いています。担当された方がしっかりと管理してくれるおかげで、私たちは安心して活動ができるのです。もうすぐ20周年、いえ、30、40周年を迎えたいものです。

### さつま町立流水小学校 親子読書いもむしの会

代表者 南 祐子  
鹿児島県薩摩郡さつま町

鹿児島県読書推進運動協議会  
〈推薦〉

いまから57年前の1959年1月、本校は児童文学作家 椋嶋十先生の提唱により、県内初の「親子20分間読書」をスタートさせました。その後、各地に活動が広がり、読み聞かせグループの誕生や、学校の読書指導にも影響を及ぼし

お父さんたちも積極的に関わっているのが特徴に



たとわれています。

そのなかで発足したが、本校研修部を中心に取り組んでいる親子読書「いもむしの会」です。「いもむしの会」の名称には、いもむしの幼虫が、葉をムシヤムシヤと食べるよう、みんなで本のページをムシヤムシヤと読み進めて、すてきな夢がふくらんでいくようにという願いが込められています。

いもむしの会は、1994年にスタート、今年で23年目を迎えます。2005年には親子20分間読書の発祥から45周年を記念し、校舎入り口に本を開いた形をモチーフとした記念碑を建立しました。会は年間10回、活動しています。そのうち3回は、学校で学期ごと

に計画される校内読書週間にあわせて行います。保護者が出勤前に各クラスで子どもたちにあわせた本の読み聞かせをします。子どもたちは、だれがどんな本を読んでもくれるか、とても楽しみにしており、静かな教室で充実した活動をしています。

ほかの7回は、土曜授業後に約1時間、各学年の保護者がひとつのチームとなって会を行います。梅雨の時期には雨に関する本、7月は七夕、9月はお月見、12月はクリスマスというように四季にあつた本を選び、読み聞かせをしています。

読み聞かせのほかにも絵描き歌をみんなで楽しんだり、サンタさんへの願いごとをカードに書いてクリスマスツリーに飾りつけたり、1月には福笑いをみんなで楽しんだこともありました。

また、「お話しサート」として、ピアノ講師をしている保護者による演奏と手遊び歌、クイズなどを織り交ぜた読み聞かせをしたりしています。

本校の保護者は全員読み聞かせができ、父親も積極的に関わっています。これからの体制を維持しながら会の充実を図っていきたいと思います。

# 2017・第71回読書週間

## ポスターイラスト募集

### 標語は「本に恋する季節です！」



2013年  
サヨコロさん



2015年  
かざきにさん



2014年  
ゆえまつこさん



2016年  
吉川ケイタさん

秋の「読書週間」のシンボルであるポスター。ポスターイラストを使ったPR広告も、各種雑誌に掲載予定です。

#### ○賞

・大賞(1名)……賞状と賞金10万円

・優秀賞(3名)……賞状と賞金1万円

・入選(10名前後)……記念品(図書カード)

#### ○応募要項

①標語「本に恋する季節です！」をイメージした未発表の創作原画「読書週間」などの文字情報は作品に入れないこと

②サイズB4判、タテ

③用紙・画材自由

④CG作品はプリントアウトしたもの

⑤カラー、モノクロとも可。立体

半立体、写真、コピーは不可  
⑥応募資格 高校生以上。合作は可だが、応募はひとり1点  
⑦ハガキ大の用紙に以下を明記し、作品の裏面に添付のこと  
氏名、郵便番号、住所、電話番号、年齢、職業、メールアドレス(任意)  
⑧応募締切 6月23日(金)必着  
⑨送り先 問い合わせ先

〒162-0838 東京都新宿区袋町6 日本出版クラブ会館内

公益社団法人 読書推進運動協議会「読書週間ポスターイラスト」係

TEL 03-3260-3071

⑩発表 8月上旬、入賞者に通知

⑪入賞作の二次使用権は公益社団法人 読書推進運動協議会に帰属

⑫作品は返却しません。返却希望の方はその旨を明記し、手数料として切手400円分を同封すること。

### 事務局報告(3月)

☆1日 読書推進運動協議会の公益社団法人認定について内閣府の調査

☆1日 こともの読書週間ポスターについて、杉浦康平事務所で出版印刷と校正、責了

・2日 上野の森親子フェスタ 運営委員会に出席

・3日 伊藤忠記念財団・文庫助成贈呈式に出席

☆9日 機関紙「読書推進運動」(27号)データ入稿

・14日 上野の森親子フェスタ 運営委員会に出席

☆15日 機関紙「読書推進運動」(27号)発行

・21日 日本児童出版美術家連盟懇親会に出席

・16日 上野の森親子フェスタ 2017 出展者説明会に出席

・21日 新宿区子ども読書推進会議に出席

☆21日 こともの読書週間ポスター」できがり。全国の読書推進運動協議会・書店・学校図書館に送付

・23日 平成28年度 決算報告書案」について大光監査人と打ちあわせ

・23日 東京子ども図書館 かつら文庫 見学

・26日 城西国際大学特別企画「絵本ワークショップ」展示即売会」に出席

・27日 JPIIC読書アドバイザー講座 座修了式」に出席

・27日 平成29年度 事業計画」を内閣府に提出

・28日 第56回 全出版人大会 協賛団体事務局打ち合わせ会」に出席

ひ・と・こ・と

●マラソンを走るようになって、気づいたことのひとつは、「応援されたい」という気持ち。力になる、応援が力になる、というスポーツ選手のことばを聞くたびに、「好きでやっているんだから、応援の有無は関係ないんじゃないか?」と思っていた私ですが、実際に大会を走ってみると、「あ、本当に力になる」と身にしみます。

●この3月は夫が静岡、私は名古屋の大会を走りました。静岡の前日には、遊本館(静岡市)の清水奈緒子さんに市内を案内していただき、名古屋(岐阜県関市)の波多野いとしさんから地元の新聞とテレビ中継の録画をいただきました。どちらの大会も多くのスタッフやボランティアがランナーが安全に走れるように支え、沿道の人たちは応援のことばだけでなく、お菓子や脚の痛みをやわらげるスプレーを提供してくれました。応援がほしくて走っているのではありませんが、趣味で走る人たちに多くの人が笑顔で応えてくれることは、素直にありがたく、また次に走るエネルギーとなります。

●本紙で紹介している優良読書クラブや野間読書推進賞受賞者のみなさんもよく、「好きなことをやってきただけ」と言いますが、その活動報告からは、「好きなこと」を継続するための、さまざまな工夫や苦労が伝わってきます。そんな人たちの日々の積み重ねが充分に発揮される機会であり、次への糧となる子どもたちの笑顔が満開の「こともの読書週間」、いよいよです。(伸)